Research Institute for World History
Newsletter
No. 26 January 2016

CONTENTS

■ シンポジウム「16・17 世紀の海上貿易と海商、海賊
～東地中海と東アジア海域の比較の試み」を終えて　越村勲　— 1 頁
■ New Waves of World History Teaching in/from Asia
Shingo MINAMIZUKA　— 8 頁
■ RIWH アフリカ奨学基金第 4 期 ご寄付のお願い　—11 頁

発行： NPO-IF 世界史研究所 http://www.npo-if.jp/riwh/

世界史研究所「ニューズレター」
第26号（2016年1月）

シンポジウム「16・17 世紀の海上貿易と海商、海賊 ～東地中海と東アジア海域の比較の試み」を終えて

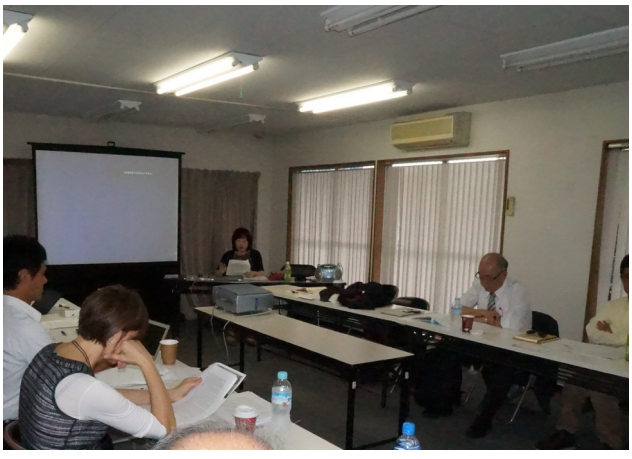
越村勲

昨年 9 月 26 日、世界史研究所にて、標記のようなシンポジウムを行いました。以下に当初の趣旨、報告の概要、そして総括と報告集の出版に向けての今後の活動について報告致します。

当初の趣旨

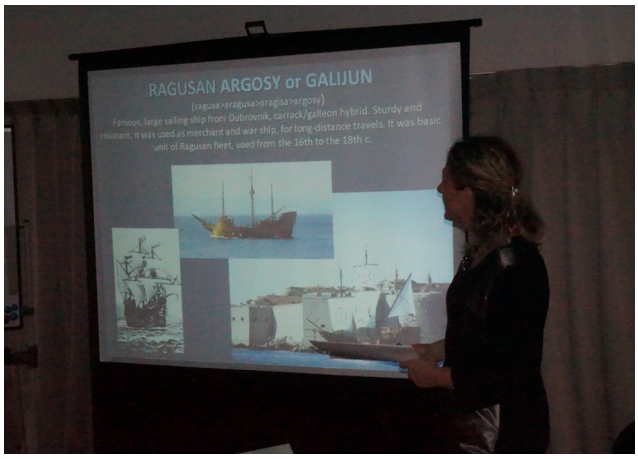
まず私が関心を持ったのはクロアティアのウスコクです。このウスコクはブローデルの『地中海』にも登場する海賊です。日本ではほとんど知られていませんが、本国クロアティアでは多くのうたに詠まれた英雄です。

このウスコクは大航海時代の幕開け以後の早い時期、主に貧しい人々が 16・7 世紀の経済、政治や軍事の変化に反抗した一例といえるかもしれません。その意味では東アジア地域の倭寇その他の海賊とも共通します。そこで私はウスコクと倭寇、つまり東地中海と東アジア海域の海賊の比較を試みることにしました。



その際問題となるのは、どのような枠組みで二つを比較するかということです。そこで第一に参考にしたのが、ウォーラーステインの義賊論です。ウォーラーステインは、「長い 16 世紀」に「ヨー

ロッパ世界経済」が誕生すると見ているが、かれはそれにともなって生ずる経済の再編過程で生じた混乱の一徴候として、「盗賊 banditry」を位置付けている。彼によると、絶対主義国家が形成されていくなかで、国家は一部の貴族から伝統的諸権利を奪い、農民の一部から生産物を奪い、その官僚機構を維持するとともに、国家の中に富の集中をつくリ出す。そして、インフレや人口増加や食糧不足にさいして平等な分配を保障できないよ



うなときに、義賊が現れる。

ただ私は、今のところ、ウスコクはブローデルのいう「強盗行為は潜在的な農民一揆であり、窮乏と人口過剰が生んだ息子である」と考えています。またウスコクは、社会的義賊の面もたしかにありますが、政治的な境界で強大な政治的権力と戦ったため、その英雄化が大いに進んだ例なのではないか、とも考えます。

以上が東地中海と東アジア海域の比較の大雑把な枠組みですが、今回のシンポジウムの直接の目的は海商・海賊という集団に絞ってみて、二つの海域にどういう違いや共通点が見えてくるかを明らかにすることです。

1. N・シュテファネッツ（ザグレブ大学）報告

「ウスコク—戦争と交易の間で」

■アドリア海をとりまく三つの大国

アドリア海に沿った地域は、15 世紀から三つの政治・経済的な大国、ハプスブルク帝国、オスマン帝国とヴェネツィア共和国の勢力争いの場であった。

一方大国間の交易はといえば、国家同士の取り決めや公式の合意に加え、境界を越えたお金と商品の流れを生むような、いろいろな非公式の慣行があったため、戦争やイデオロギーにはあまり左右されなかった。たとえば、ドゥブロヴニクは毎年貢納金を払ってさえいた。ハプスブルク帝国にしても、オスマン軍勢の侵攻を止めさせるため 、16 世紀には毎年貢納金を支払っていた。

どちらかといえば非公式な方法として、絶え間ない戦争に巻き込まれた現地の人々は、戦争経済つまり戦争状態に順応し密輸や略奪を基本とした経済を推し進めたが､それは彼らの公的な政治的･宗教的な立場と矛盾するものだった。

■アドリア海での正式な交易

アドリア海を通じて、ヴェネツィアとドゥブロヴニクは、いろいろな外国にしかない商品をオスマン帝国、北アフリカ、中近東や極東から輸入して、それらをヨーロッパの買い手にもたらした。当初彼らは、西側のためにアジアの生糸、様々な高価で刺繍のついた東方の織物、皮革、ラクダ織とモヘア布、綿、蜜蠟、スパイス、貴重な宝石と金属、染料などを輸入していた。一方オスマン商人はヨーロッパの贅沢品を買い入れた。貴重な織物、ガラス細

工、窓ガラス、眼鏡、金細工、地図、薬など。

アドリア海は、鉄、武器、塩、小麦、銅、単純な毛織物、木材、皮革その他の原材料に関して、西方と東方の相互交換の場という役目を果たした。

ダルマティアの諸都市は、東ヨーロッパから来てヴェネツィアやドゥブロヴニクあるいは西欧に送られた鉄と銅の中継地点であった。アドリア海の交易の商品は季節によって違った。ダルマティア各都市から輸出される商品は、その最も共通する商品がオリーヴ油、生のあるいは塩漬けにされた魚、塩、ワイン、チーズそしてイチジク（また馬や、羊、皮革、生のウール）といった一次産品だったからである。一方粗い羊毛の織物、木材やそれに類似した、海岸とその後背地でも作られたか、あるいは内陸から運ばれた商品もあった。

ただしダルマティアの諸都市は交易活動を全面的に発展させることはできなかった。結局、ダルマティアやイストリアの商人は活動範囲が制限された。唯一、ヴェネツィアのスプリットは 1592 年に設立される大きい港でオスマン帝国とアドリア海の交易が行われて繁栄した。

■私兵と戦争経済

16世紀には、コルセアに類似したグループは、内陸に現れた。ジュンベラクとセーニのウスコクは、16 世紀後半の例である。これらのグループは様々な名前で呼ばれていたが、多くの場合ウスコクつまりどこかの地域や船、町に飛び入り、これを攻撃する人と呼ばれた。彼らは、船を襲撃して、略奪し、禁制品を密輸した。その代表がセーニのウスコクである。

一方セーニに近いバカルのウスコクは発生から独特だった。それは 1550 年代から、地元の大貴族ズリンスキ家によって庇護されて作られたグループである。ではどうしてこのようなことになったのだろうか？

ズリンスキ家は兵役と引き換えに彼らに土地を与えるか、または、彼らはリーダーに形だけ給与を支払って、これに報いた。それらの無給の兵士は統制のきかない軍隊をつくり、戦争経済つまり塩と禁制品の密輸や略奪で生きていた。三大国の間の、地味ではあっても持続的な衝突により、境界の住民の多くは独特の生活を続け、独特の倫理コードを作り上げた。その結果として、平和になっても、かれらをコントロールすることは難しくなったのである。

2. S・ラザニン（ザグレブ大学 / 移民研究所）報告

「難民から海賊へ」

同氏は、ウスコク研究史を、ウェンディ＝ブレイスウェルの研究を軸に概観する。

ウスコクに関する最初で包括的な研究は、

1930 年代に発表された。しかし当時は、ウスコクを民族的英雄として讃えた。共産主義期には、「社会的正義」のために戦う者として描かれた。一方、外国研究者はウスコクを大国間関係の攪乱要因と見た。

ウェンディの研究だが、彼女はそれまでの研究と違って、ウスコク自身やかれらの歴史的役割をどうみていたかに的を絞っていく。その最も革新的な部分は、ウスコクを彼らが育った境界世界の状況の中に位置づけ、そして、自分たちの問題にどう反応したのかを分析した点にある。それらを、ヴェネツィアの裁判記録や軍・外交の上層部の証言で裏付けている。以下はウスコクの海賊行為の特徴点である。

ウスコクは、通常、彼ら自身の海賊行為のために船を没収することはしない。

■「小さな戦争」と交易

「小さな戦争」とは境界における戦争のこと。敵を破壊する古典的な軍事行動ではなく、「略奪経済」つまり人と品物の恒常的で複雑な「交換」である。

■境界にすむ人々のヒロイズムとリアリズム

ウスコクは、名誉、決闘そして「きずな」についての共通観念によって、衝突、流血といったものをコントロールできた。伝統的な解釈と対照的に、普通の農民は、ウスコクの勇敢さを賞賛したが、かれらを「被抑圧階層」の闘士として美化したりはしない。彼ら自身がしばしばウスコクに襲われており、それが住民の間に恐れと畏怖を植え付けていたからである。

3. 飯田巳貴（専修大学）報告「16・17 世紀のヴェネツィアとアドリア海の海外領土、経済的側面からの考察」

飯田報告は領土や住民のアイデンティティに触れながら、経済的側面から、ヴェネツィアにとってのアドリア海における海外領土の役割について述べた。その「第一の役割は、船舶の寄航地および商品の中継地である。レヴァント（東地中海）からは、16 世紀まではおもに東方産品や高級染料、生糸、皮革、蜜蠟などが輸送された。17 世紀になると、輸送品の中心は生糸や皮革に移行した。バルカン内陸部からは、家畜や駄獣となる動物、食肉、陸路経由で運ばれたレヴァント商品が、またイタリア半島のプーリアからはオリーブ油や穀物が輸送された。第二の役割は、日常生活に不可欠の必需品である塩やオリーブ油の生産地としての機能である。第三の役割は、商品、特にヴェネツィアで製造された完成品の輸出先（消費市場）である。16 世紀後半から、ヴェネツィアでは毛織物、続いて絹織物などの繊維製品製造が急成長した。ヴェネツィアやフィレンツェでの絹織物製造業は、当時のヨーロッパや地中海周辺で最も高い技術を誇っていた。ただし、その最大の顧客は、近世ヨーロッパで最大級の都市人口や宮廷、富裕層

を擁するオスマン帝国である。このような高級品についてはアンコーナ～ドゥヴロブニク・ルートを通じて輸送された。

またヴェネツィアはドゥヴロブニクへの対抗措置として、16世紀末にアドリア海北部のスパラト（スプリット）に指定市場を設けた。バルカン内部のオスマン臣民であるギリシア商人やユダヤ教徒商人、あるいは税関関係の官吏のなかには、ドゥヴロブニクの繁栄に対してヴェネツィアと同様の利害関係を持つ者が多かったことから、こうした人びともスパラト建設に際してヴェネツィアと協力体制をとった。

飯田は、海上保険に関する統計（1592-1609）からウスコクの影響はそれほど大きくなかったと推察する。この統計から、海賊的行為の被害が小さくなかったことが伺える。海賊行為の主体に関しては、ウスコクの他に、トルコやイングランドがウスコクと同程度、また数は少ないがスペイン、バルバリアなどの名称が見られ、ウスコクが突出しているとはいえない。

4. 松浦章（関西大学）報告「16世紀中葉から17世紀初頭の東アジア海域の海上貿易と海商・海賊」

東アジア海域において「倭寇」と呼称された海賊が出没したのは、朝鮮半島に侵入した1350年が最初とされ、中国では元朝末期から明朝の初期にかけて中国沿海も襲撃の対象になった。その後、明朝の嘉靖年間（1522-1566）の時期にも倭寇の侵攻は盛んとなるが、とくに16世紀の倭寇発生の温床として、明朝の海禁政策と朝貢制度とが関係していた。

14世紀に元朝を漠北に追い返した明朝は、国初より民衆の海上交通を厳禁する施策を実施する一方、周縁諸国に朝貢を促し、海外諸国からの朝貢も積極的に認めた。この政策は正徳年間（1506-1521）ころまでは順調に推移していたが、嘉靖年間（1522-1566）になると明朝の海上政策に抵抗する中国人や、中国の物産を求める諸外国からの来航が急増した。海禁の語が常用されるのも、嘉靖年間以降である。

嘉靖時期に倭寇・海賊が興起した理由としては、1556年4月に、一理由として、王直や毛海峰等が、厳戒の海禁政策により暴利を計ることが出来ず、海賊集団を率いて襲撃していること。また、当時の中国沿海地区では民衆の海上貿易、海外貿易に関する要望の高まりがあったことも確かであった。別の理由は、日本国内の飢饉のため米価が騰貴して人々が飢えに苦しみ略奪が横行して

いるが、日本の統治者はそのことを認識せず対策をしていないとするものであった。

この時期の倭寇は、必ずしも日本人で構成されていたのではなく、大部分は江蘇、浙江、福建、広東沿海居住の民衆であった。

■ 17 世紀初頭の中国海商の一経営形態

中国海商の経済活動を明らかにする具体的事例は少ないが、その中でも詳しく知りうる例がある。萬暦年間（1567-1619）のことであるが、福建省福清の人で林清が、船舶所有者である船戸の長楽県の王厚とともに大型海船を造船して、航海士、下級船員の水手、さらに銀匠、案内人、そして倭語（日本語）に詳しい者を通事として雇用した。

このような方法は海外貿易による利益が巨大であったからである。彼等が中国から日本へ持ち渡った紗羅（うすぎぬ）・布匹であるが、紗羅は、布地の薄い絹織物で、製造方法が複雑であったため高級な絹織物とされた。布匹は一般には木綿地の織物であるが、当時の木綿織物は中国が世界最高の技術水準にあった。

17 世紀前半において中国浙江の湖州で製糸された生糸の湖絲 100 斤が銀 100 両とされ、それを中国商人が海を渡ってフィリピンのルソン島にもたらせば銀 300 両となったとされる。この湖絲の他にも江西の磁器すなわち景徳鎮磁器や福建の砂糖製品、乾物果物類なども好まれたように、16-17 世紀における中国製品は世界の人々からすればあこがれの品々であっただろう。

5. 上田信（立教大学）報告

「「徽王」考—王直が描いた政治構想—」

「同一のシステムにはまだ包摂されていない 16 世紀の東アジアとヨーロッパとにおいて同質の現象が期を同じくして発生するばあい、一つの方法は東と西のシステムのあいだの媒介者を措定することである」。上田報告は、その媒介者として後期倭寇の頭目王直（本名：王錐）を想定する。かれの海上政権構想を、上田は「蜃気楼王国」と名づけた。中国と日本とは、この蜃気楼王国が実態を伴わないようにするために、「近世的国家」へ脱皮していかざるを得なかった。以下が上田報告の要旨である。

■海洋商人から後期倭寇へ

徽州出身の王直は青年のときに、塩商となろうとして商業の道に入ったものの、自ら明朝の禁令を犯し、塩商として成功する前途を閉ざされた。1540 年に広東に赴き、漳州の海洋商人グループに参加し、大型外洋船を建造して密貿易に従事するようになった。

このころ繁栄を遂げていた双嶼港に、突如、終焉のときが訪れる。1548 年、浙江巡視都御史の朱紈が軍隊を派遣し、双嶼港に拠る交易商人を掃討する挙に出たのである。この事件を契機に、海洋商人たちは明朝と敵対せざるを得なくなる。双嶼港を拠点としていた海洋商人は王直のもとに結集し、舟山と大陸との間の烈港に新たな拠点をつくり、日本とのあいだの交易を続けた。王直は他

の海洋の勢力を吸収しながら勢力を拡大し、東シナ海を制圧するにいたる。1553 年に官軍により拠点の烈港を再び攻撃され、王直は中国沿海から退いた。

■「徽王」の構想

中国の沿岸を退いた王直は、明朝の官憲の手が届かない日本の沿海に居を定めた。すると、それまで双嶼港に来航していたポルトガル人が、多く参集するようになったと伝えられる。徽王＝王直が抱いていた政権構想とは、シナ海域における通商権と警察権とを自分が掌握することである。しかし宿敵胡宗憲は、王直が提起した方策に沿って、事態の打開を図ろうとするが、最終的には王直から賄賂を受けたとの疑いを掛けられ、自らの保身のために王直を斬首にせざるを得なかった。

王直の死によって「嘉靖大倭寇」と呼ばれた宣戦布告なき戦争が終結した。民間の交易をある程度は認めなければ、倭寇再発の恐れがあるという議論が強まり、明朝もまた海禁の緩和に向けて動き始めた。ついに 1567 年（隆慶元年）に華南からヴェトナム・マラッカ方面に向かう西洋航路と、中国から台湾・フィリピンを経てブルネイ方面に向かう東洋航路について、対外交易を行うことが認められた。王鋐が描いた夢の一部が、現実のものとなったのである。ただし、日本との交易は依然として厳禁された。

■構想の実現

平戸を拠点にシナ海域で通商活動を展開していた福建系海洋商人であった李旦と顔思斉の海上勢力を継承した鄭芝龍は、1626 年には中国の福建沿海地域で武装活動を展開し、競争相手を次々と吸収していく。当初は百数十隻であった配下の艦船は 27 年には数百隻の船団で、オランダ船を包囲し敗退させている。28 年に厦門を占領すると、明側は鄭を海防遊撃という沿岸警備の役職に任じた。

鄭芝龍は、海賊を駆逐するという功績を挙げつつ、官位を登っていく。それは明朝と連携して他の勢力を海から駆逐し、東シナ海の制海権を完全に掌握するプロセスでもあった。こうして鄭芝龍は、王直の夢を実現させたのである。

総括と報告集の出版に向けての今後の活動

以上の報告を踏まえて言えば、1、飯田・松浦またシュテファネッツ報告から、東地中海と東アジア海域で、具体的な商品を通じて、「世界システム」の形成過程を具体的に見ることができます、一方 2、松浦報告では海賊行為への民衆の関わりは窺えるものの、上田報告では海賊は「義賊ではなかった」と結論付けられます。これはラザニン報告で紹介されたウェンディ＝ブレイスウェルの研究とは内容が大きく違います。3、今回の報告から見えてきたことの一つとして、フランクや山下範久氏が行ったウォーラーステイン学説の修正、すなわち従来「世界＝経済」の外部とされてきた空間には、いくつかの「世界＝帝国」が共存するグローバルな近世空間が広がっており、さらにそれは理念的な空間秩序を共有しつつ共通の空間分節様式をもつ五つ

の「近世帝国」によって安定的に分節されているとします。この五つの「近世帝国」のうち、ハプスブルク帝国とオスマン帝国がウスコクに、明帝国が倭寇にかかわっています。その意味では「世界システム」とともに、「近世帝国」という共通な枠組みで二つの banditry を分析することは可能であると考えられます。４、その上で、シュテファネッツ報告で登場した（持続的な戦争状態の中の境界における）「戦争経済」（従来は「小さな戦争」）ということばでウスコクの海賊行為を特徴づけ、上田報告にあった王直や鄭芝龍の海賊行為を「経済戦争」とよぶことはできないかと考えている次第です。

ただし、報告集の出版に向け、飯田氏にはアドリア海における「銀」の動きとウスコク被害に関する統計のより詳しい解説を（シュテファネッツ報告にある 1592 年以降の動きを勘案して）、松浦氏には海商＝海賊活動が清時代に「終焉」する要因について補足をお願いし、上田氏には、中国以外では歴史家が海賊への民衆の関わりについて明示的に述べている関係上、海賊＝階級闘争史観は中国でいつごろ、どのような理由で衰え、海賊＝犯罪者観になったのか教えていただければと思っています。

New Waves of World History Teaching in/from Asia

Shingo MINAMIZUKA

This is a project of Asian historians to compare the world history teaching in Asian countries working from 2012.

1. Beginning

In October 2010, AAWH -then Minamizuka was President- distributed questionnairs on the world history teaching in Asian countries, asking about the curriculum, teachers, textbooks etc. We received answers from 8 countries. The rough analysis was introduced in a session in the 2nd Conference of AAWH in Seoul in 2012 together with presentations from three countries; from Korea (Kang Sunjoo), from China (Zhang Weiwei) and from Japan (Yoshimine Shigeki). The response of the audiences to the session was enthusiastic, strong voice being raised that there should be publication on the comparison of the world history teaching in Asian countries, since we know little about that each other.

2. New Project

After the Seoul Conference, we stated a new project to prepare the publication of collection of articles. Beside three papers, we could include papers from India, Vietnam, Singapore, Indonesia and the Philippines. By the middle of 2013 all the papers were ready. Here arose an opinion that we should meet together to discuss and

coordinate our papers so that we can compare more effectively. Thus we started to find some financial support. And finally RIWH got one from the Mitsubishi Foundation in 2014.

3. First Workshop

We held the first workshop in Nov. 2014 in Tokyo. We checked all the papers presented and discussed on what were lacking and what were to be deleted in order to compare each other. Thus we had papers introducing the history and the present state of the world history teaching in Asian countries in comparable style. But at this moment, we thought it necessary to include some articles or columns that deal with the cross-nation topic. At the workshop we didn't decide what topic will be suitable. After the workshop, RIWH proposed to every contributor that we collect the descriptions of the Opium War of 1840 in the textbooks that are most popularly used in each country. They were collected by March 2015.

4. Second Workshop

The second workshop was held in April 2015 in Cebu. We checked the revised papers of each member and agreed more information should be added on the Islamic point of view. The Indonesian and Indian papers would enrich their papers with this topic. We compared how the Opium War is described in the world/national history textbooks. We were surprised to find that except China, India, Korea and Japan there are no description on the War; the Philippine is rather unique in that they deal with the War in connection with the Christianity. We discussed how to find connections of Asian countries before/during/after the War in various level of history; political, economic, social, cultural and religious. At the same time we compared the composition of the world history textbooks by analyzing the contents of textbooks of each country. In addition to the papers dealing with national cases, this comparison taught us that the world history teaching in most of Asian countries is experiencing great change since the 1990s at least toward overcoming the Euro-centered world history; Korea running ahead and Vietnam trying to catch up. We convinced that this is a new wave for world history teaching.

5. What is to be done

1) We will improve the papers reconsidering the discussion in the Second Workshop by the end of May. The papers will be arranged for the publication.

2) We will try to continue the project in the sense that we compare the descriptions of important historical events in our textbooks as we did on Opium War; we have in mind, for

example, the French Revolution, the Indian Mutiny, Civil War in the US, Meiji Restoration etc.

Participants of the second workshop

Members

China

・Yang, Biao

East China Normal University, Shanghai

・Zhang, Weiwei

Nankai University, Tianjin

India

・Adapa, Satyanarayana

Osmania University, Hyderabad

Indonesia

・Suwignyo, Agus

Gadijah Mada University, Yogyakarta

Japan

・Ibaraki, Satoshi

Joetsu University of Education, Joetsu

・Yoshimine, Shigeki

Hokkaido Yuho High School, Sapporo

Korea

・Kang, Sunjoo

Gyenogin National University of Education, Manan

the Philippines

・Gealogo, Francis Alvarez

Ateneo de Manila University, Quezon

Singapore

・Y.H., Teddy Sim

National Institute of Education, Singapore

・S.N., Chelva Rajha

National Institute of Education, Singapore

Vietnam

・Ta, Thi Thuy

Academy of Social Sciences, Hanoi

Coordinator

・Minamizuka, Shingo

NPO-IF Research Institute of World History, Tokyo

RIWH アフリカ奨学基金第 4 期 ご寄付のお願い

世界史研究所では皆さまの篤志に支えられて、2011 年度から「世界史研究所アフリカ奨学金」の制度を運営してまいりました。第 4 期奨学金は過去 3 回と同様、ナイジェリアのイロリン大学人文学部歴史学科および国際研究学科の学生の方が対象です。

経済的困窮のなかで向学心に燃えるアフリカの学生を支える一助を皆さまにお願いしたく存じます。日本のコーヒー数杯分程度のご援助でかまいませんので、皆さまのお志をいただければたいへんうれしく思います。

募金の送り先は以下のとおりです。期日は 2016 年 3 月末までとなっております。どうぞよろしくお願い申し上げます。

三菱東京 UFJ 銀行 渋谷支店

口座種別　普通預金

口座番号　0683412

口座名義　(特) 歴史文化交流フォーラム 理事
南塚信吾

第 1 期から第 3 期の奨学生のみなさん

お知らせ

世界史研究所ウェブサイトのリニューアルに関するお知らせ

世界史研究所では、研究所ウェブサイトを通じて電子化された世界史研究の情報の収集・発信を行っていますが、昨年、千葉大学に設置されていたサーバーがサイバー攻撃を受け、データが損失し、サーバーの移転を余儀なくされました。皆さまにはご迷惑をおかけしました。深くお詫び申し上げます。昨年秋、ウェブサイトをリューアル致しました。新ウェブサイトのアドレスは、次のとおりです。

新 URL： **http://www.npo-if.jp/riwh/**

現在、可能な範囲でデータの復旧に取り組んでおります。引き続きご不便、ご迷惑をおかけいたしますが、何卒ご理解のほどよろしくお願い申し上げます。なお、世界史研究所「ニューズレター」のバックナンバー各号に関しましては、新ウェブサイトより PDF 版がダウンロード可能です。

今後とも、当研究所ウェブサイトにご愛顧を賜りますようよろしくお願い申し上げます。

本ニューズレターへのご寄稿は随時承っております。
文献紹介、研究情報など、世界史に関するご投稿をお考えの方は、当研究所までご連絡ください。

『世界史研究所 Newsletter』編集担当一同

発行日：2016 年 1 月 15 日
発行者：NPO-IF 世界史研究所

NPO-IF 世界史研究所

〒 150-0002　東京都渋谷区渋谷 2-17-3　渋谷アイビスビル 10F
tel: 03-3400-1216　fax: 03-3400-1217
e-mail: world_history@npo-if.jp　URL: http://www.npo-if.jp/riwh/

スタッフ

所　長	南塚 信吾（千葉大学・法政大学名誉教授）
顧　問	下村 由一（千葉大学名誉教授）
	百瀬 宏（津田塾大学名誉教授）
研究員	木村 英明（早稲田大学講師）
	木村 真（日本女子大学講師）
	山崎 信一（東京大学講師）
	姉川 雄大（千葉大学特任助教）
	崎山 直樹（千葉大学特別研究員）
	鹿住 大助（島根大学講師）
特別研究員	稲野 強（群馬県立女子大学名誉教授）
	近藤 正憲（学術博士）